

## 現場の声

### ～共通科目「体育」のささやき～

萩原武久

人間総合科学研究科教授 体育センター長

はじめに

「国家の品格」藤原正彦著（新潮新書）がベストセラーになっている。戦後、祖国への誇りや自信を失うように教育され、すっかり足腰の弱っていた日本人は、世界に誇るべき我が国古来の「情緒と形」をあっさり忘れ、市場経済に代表される欧米の「論理と合理」に身を売り、日本は国柄を失い、「国家の品格」をなくしてしまったというものである。その国家の品格を取り戻すには、卑怯を憎む心と惻隱の情が大切であると説いている。

この「論理と合理」の概念は、体育・スポーツの世界にも蔓延し、脆弱な人づくりに一役も二役も買っている皮肉な現実がある。

「体育」って身体を使うこと？

体育・スポーツにおいても科学的論理と近代的合理精神が必要であることに異論はないが、論理だけで体育・スポーツを語る

ことはできない。体育もスポーツも、そこには体を動かす身体活動が伴わなければ、体育・スポーツとして成立しない。

しかし、残念なことに体育＝体を動かすことは、闇雲にくたびれるほど動き回ることだと理解をしている人たちの何と多いことか。

身体を使う運動とは、神経や筋肉と対話をしながら、五感を総動員し、自らの身体を慈しみながら行う崇高な行為だと思うのだが、論理では説明しきれない人の機能や、ゲームの結果など、ファジーな部分を多く抱える体育は、評価をされることもなく日陰に追いやられていくことになる。

大丈夫？ 筑波大生の「身体」と「こころ」

本学は開学以来、共通科目「体育」を全学生4年間必修という、国内外をみても類を見ない取り組みを特徴としてきた。しかし、1991年の大学設置基準の大綱化に伴い、

単位数からみると4単位必修を継続したところは3学類のみであり、全体で32%減少した。

開学以来、体育センターが実施している体力測定の結果から、1983年(昭和58年)と2005年(平成17年)の体力を比較してみる。

身長全体の平均は、1983年が170cm(男)、158cm(女)、2005年は171.5cm(男)、158.5cm(女)、体重については、1983年が61.5kg(男)、51.0kg(女)、2005年は62.4kg(男)、52.3kg(女)であり、形態的には全国的な傾向と同様に、学生の身体はまだ大きくなっていく右肩上がりの傾向を示している。

反対に衰えの激しい右肩下がりの身体能力は、持久的能力の指標とされる12分間走であり、1983年は2,680m(男)、2,190m(女)、2005年は2,440m(男)、1,990m(女)とこの22年間で、男子が240m、女子が200mも走ることでできる距離が短くなったことになる。このことは単に、体力の中の持久的な衰えのみではなく、活動量や行動力といった、積極的な「こころ」の問題とも関連があるだけに、何とも気がかりな結果である。

これらの結果を裏付けるようなことが、平成14年度から実施している体育センターの「学生による授業評価」の、共通科目「体育」に関わる希望や意見の自由記述からも読み取れる。多くの学生は2年から4年の体

育に対して肯定的でかつ高い評価をしている。しかし、中には「体育の授業はいらない」「体力テストは無意味だ」「1時限と3時限の授業はきついで廃止すべきだ」というような露骨な体育否定論も散見するが、最近、そのような意見が増えていることに一抹の不安を感じないわけではない。

## 大学は何をすところ

本学の理念では、創造的な知性と豊かな人間性を備えた人材を育成することを謳っているが、この理念が時として、専門領域の教育・研究のためという言葉でかき消されてしまっていないだろうか。

上述の「体育の授業はいらない」という学生の意見は、私の担当するサッカーの授業でも、「そんなに動き回るためにサッカーをやってるんじゃないよー」と言うが、走らないで、動かないでどうやってサッカーをするのか、どうにも理解に苦しむところである。

また、「1、3時限の授業がきつい」という意見も、1時限については「夕べは遅くまでレポートを書いていたんだよ」とか、「夜中までバイトだったんだよ」という声が聞こえてくる。3時限の授業については、「満腹の状態では運動をさせるなよ」というのが、言い分である。私の言い分を言わせて貰えば、「運動する前に満腹になるほど食事

をするな」ということになる。1週間に1回位、昼食を満腹にとらなくても、人の身体に支障をきたすことはない。また、朝早い時間に授業があるのであれば、それに備えて準備をすることが当たり前のことである。我々は、このようなあたかも論理的かと思われる我儘な考え方の学生に対し、「体育」を通して社会とは何か、人生とは何かを問いかけているのである。

大学は、専門を生かすための豊かな人間性を備えた人材の育成を目標としているのではないのか。今こそ、理念に則り学際的な協力のもと、「協働」で「骨太の学生」を「共育」する時期ではないかと考えるが、如何であろうか。

「企業の求める人間像」は「社会の求める人間像」でもある

朝日新聞社が主要企業100社を対象にした07年春の新卒者の採用計画調査によると、採用にあたって重視している能力を選択肢から三つ選んでもらったところ、「コミュニケーション能力」が最多の76社で、次いで「行動力」56社、「熱意」41社、「人柄」32社、「責任感」19社、「協調性」12社、「価値観」9社、「学生時代の活動」8社、「マナー」「語学」「成績」は0社という結果が出たという。

我々は、これらの結果を二つの視点から

眺めるべきだと考えている。一点は「企業の求める人間像」は、企業だけではなく「社会の求める人間像」であることを認識すること。そして、もう一点は、これらの能力の開発や向上のために大学は何を行っているかである。

「体育」はこれらの「コミュニケーション能力」「行動力」「熱意」「協調性」といった項目について、全てを論理的に証明ができるわけではないが、それらの能力の開発や向上に貢献していることは事実である。

いいねー！「体育」って！

体育センターは通常の共通科目「体育」の他に、学外での集中授業も展開している。次はS・Mさんの「17年度のスケート集中授業」のレポートから、「先生方へ一言」「仲間へ一言」「後輩へ一言」の全文を引用し、「体育」の核心に迫った内容を紹介したい。「先生方への一言」

授業だということを忘れてしまうような楽しい時間を過ごせました。机を前にして教科書を読んでノートを取るような形態の授業ではないからこそでもあり、また、先生方の指導方法が「スポーツを楽しむ」という目的のもとに行われていたからではないかと感じました。実践が重要である体育の授業として、非常に適していたと思います。また、5日間という短期間での技術習得

や向上が実現できるような、コツを教えることを中心とした的確なご指導でした。ありがとうございます。

#### 「仲間への一言」

この集中授業を受講して本当に良かったと思えた理由の大半は、班の仲間によるものです。習得したスケート技術と同じくらいに、彼らと築けた縁が貴重です。集中合宿という非日常で新しい知己を作ること、また深く交流して親しくなることも、この授業の目的の一つであったと思います。班の仲間とは今後も集まって食事をするなどして交流を続けていくつもりです。5日間を彩ってくれた仲間たちには感謝の念に尽きません。

#### 「後輩への一言」

3万いくらかも取られるのはリスクが高いし、5日間ずっとスケートをし続けるのは退屈そうで、受講に躊躇してしまうかもしれませんが、そこは騙されておいたほうがいいです。5日間を過ごした後の感想に不満の言葉はないと思います。私が実際に体験した今心にあるのは、めくるめくりンク場での楽しい思い出と、この授業が終わってしまったことが悲しいという気持ちばかりです。短すぎる期間でした。もっと続けばいいと思っていました。食事も美味しいし東照宮も参れるし、山間から見上げる景色は美しく、人々が優しく、そしてな

によりスケートを好きになれます。真剣にスケートをすることが楽しくなります。この集中授業は騙されてでも受講してしまうことをお奨めします。

#### おわりに

上記の学生のような、まさしく「惻隱の情」をもった学生がいることを心強く嬉しく思うと同時に、「体育」の授業を通しての「教育と人づくりの」重さに、改めて身を引き締めなければいけないと思う。

各大学が、学生獲得のためにしのぎを削るような学生支援のあり方を工夫してきている。本学が行ってきた共通科目「体育」は、それらにも匹敵する学生支援の一つの強力なあり方だとも言えるのではないか。

今後も、体育センターは「体育」を通して、「よりよく生きるための」骨太で磐石な学生の「共育」に、胡散臭いと思われようが全力を傾注していきたい。

(はぎわら たけひさ／コーチング学分野・サッカー方法論)